



2022年10月20日放送

## 印象に残る症例②

### 打撲の漢方処方

ラファ・クリニック 院長 **正木 稔子**

打撲の漢方処方についてお話したいと思います。今このラジオをお聴きになっている先生方は、いろんな科の先生方だと思います。打撲はどこ科においても対応するのではないかと思いますので、特に整形外科領域ではマストで使って頂くといいのではないかと思いますし、オペ後も血腫で腫れますので利用価値があります。今日の話が先生方の診療の参考になれば幸いです。

本題に入る前に、私の漢方体験談をお話したいと思います。私が医師になって5年目の時。外来にスティーブンス・ジョンソン症候群から回復した方が独歩で来ました。主訴は舌のしびれ。スティーブンス・ジョンソン症候群で救命救急センターに搬送されて挿管され、しばらく鎮静をかけられていました。スティーブンス・ジョンソン症候群は、皮膚や粘膜が焼けただれたようになりますから、粘膜が焼けただれているところに挿管チューブが継続的に当たっていたため、舌の中央部が癒痕化し、舌は粘膜なのにケロイド状になっていました。「これはビタミンB12では改善しない」と確信したのですが、じゃあ何を出したらいいのか皆目検討も付きませんでした。ふとその前日に受けていた漢方勉強会を思い出し、資料を広げてみると「口内炎には半夏瀉心湯」と書いてありました。その時の私にはこれしか手はありませんでした。もちろん、これは口内炎ではありませんが、処方してみました。2週間後、患者さんが来て「先生！痺れがなくなりました！耳鼻科だから言わなかったけど実は左腕が全部痺れてたんですが、それも良くなったんです！続けていいですか？」と言

ます。それまで私は、必死に西洋医学の手技やクスリを学んできたけど、こんなに患者さんが喜んだのは初めてでした。しかも狙った症状だけでなく、思いもよらないところが改善しているなんて。この症例のお陰で私は患者さんのために漢方を勉強するべきなんだと思えました。

この半夏瀉心湯は胃腸の熱を取る処方です。胃と腸が不和を起こし、上からは吐きそう、下からは下痢もしくは軟便という状態です。脾（現代では消化機能のこと）に異常があれば口腔粘膜、口唇、歯茎に異常が現れます。この頃私は初心者すぎて、胃腸の状態まで問診するに至らなかったのですが、恐らくこの症例では粘膜が焼けただれた、つまり胃腸も粘膜ですから同じような状態だったのではないかと思います。

さて、症例です。

43歳女性

夜風呂で転倒しバスタブのへりで右顔面を強打した。しばらくうずくまって動けないほどの痛みだったため、翌日には腫れ、その翌日には青くなってしまうだろうと覚悟した。自宅に桂枝茯苓丸があったので2包内服して就寝。寝るまではズキズキと痛みがあった。翌朝目が覚めると腫れも痛みもなかった。

以上が症例です。

前回に引き続き症例は私です。本当は「治打撲一方」を飲みたかったのですが、自宅になかったため代用として桂枝茯苓丸を使用しました。

「治打撲一方」は浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』に記載してある処方です。

原文はこちらです「此の方は能く打撲、筋骨疼痛を治す。川骨、血分を和す。撲そく骨疼を去る。故に二味をもって主薬とす。日を経て癒えざる者附子を加ふるは、此の品能く温経するが故なり。」とあります。

桂枝茯苓丸と治打撲一方は、入っている生薬は全然違います。が、どちらも駆瘀血剤として有名です。打撲の血腫は「瘀血」と捉えます。血腫で圧がかかるから、痛みを生じていますよね。つまり、いかに早く血腫を引かせるかということが、打撲の治療のポイントになるわけです。

治打撲一方の特徴は、駆瘀血作用のある「大黄」が含まれること。瘀血というのは便秘を伴いますので、大黄を使うことで便秘を改善させることによって瘀血を駆除すると考えます。

あえて大黄が入っていて排便を促しますので、処方するときは患者さんに「下痢、もしくは軟便になるかもしれないけど、それが早く腫れを引かせるコツです」という一言を添えてあげるといいと思います。下痢をすると多くの患者さんは薬をやめてしまいますから。

私はミュージシャンのツアードクターをやっています。過去は海外にも帯同していましたが、慣れない土地での力仕事で打撲は案外多く、治打撲一方は大変役に立ちます。また骨折の時には骨が折れるだけでなく、その周辺が腫れ上がりますから、その血腫改善にも役立ちます。

治打撲一方は打撲のときにしか使わないので、私は月経関係で日ごろ家に常備している桂枝茯苓丸を代用として内服しました。瘀血を去るという意味合いでは方向性が同じ漢方です。駆瘀血というと、他にも更年期障害でよく使われる、「通導散」や「桃核承気湯」もありますが、この二つは瀉下作用が強い漢方薬です。瀉下作用とは、下させる、下痢させるという意味ですが、私は以前に桃核承気湯を内服した時にかなりの腹痛と下痢をしたので怖くて以後一切飲んでいません。桃核承気湯を使いたくなる症例は、週に一度しか出ない便秘や、イライラが募っていて、それが更年期障害に起因している場合に用います。打撲くらいで使用すると瀉下しすぎてしまいますので、汎用性は低く要注意ですね。

耳鼻咽喉科の診療では、顔面打撲にも利用しています。外来で、顔面を打撲して鼻骨骨折疑いで来た方で、骨折があってもなくても、治打撲一方をお出ししています。腫れが驚くほど早く引いたという声をたくさんいただいています。

クリニックのスタッフが骨折や打撲した際に処方すると、全員もれなく治打撲一方のファンになって、自ら「打撲しちゃったので治打撲一方を下さい！」と言うようになります。

また、前回に引き続き養生つまりセルフケアについてですが、条文を読むとわかりますが、「日にちが経つても治らないものは附子を加えて温めよ」と書いてあります。古典では、読んで憶測できることはあえて書いてないことがあります。つまり急性期は局所は冷やしたほうが良く、日数が経ったものは温める。附子は「温」温かいではなく、

「熱」熱するのです。浅田宗伯は明治時代の方ですので、このころからこのような考え方があったのかと思うと、漢方の奥深さに驚嘆するばかりです。漢方の条文には、医師として日常生活に落とし込んだアドバイスをするのに必要な知恵が詰まっています。

治打撲一方、ぜひお試し下さい。